

No. 197
Ichigo News

いちご通信

60代の舞妓です
おおきに～



■特集

誰も開けなかったドアを開けると、まぶしい光が輝く
～京都JCIL訪問報告～

札幌いちご会、福祉村見学へ

■新連載

車いす行政書士～障がい者が独立開業するまでの道のり～

昭和48年1月13日 第3種郵便物認可・HSK通巻545号

発行 2017年8月10日(毎月10日発行) 197号

編集人 〒063-0062 札幌市西区西町南18丁目2-1 稲嶺ビル1F

特定非営利活動法人 札幌いちご会

TEL 011-676-0733

発行人 北海道障害者団体定期刊行物協会 (HSK)

印刷 岩橋印刷株式会社

定価 750円(会費を含む)

2017年
8月号

HSK

☆もくじ☆

いちご通信 197

講演会のお知らせ	P1
巻頭言「優しい視線」 小山内美智子	P2
いちご会で一緒に働きませんか？	P4
誰も開けなかったドアを開けると、まぶしい光が輝く	P5
「おしゃべりな足指」朗読CDのお知らせ	P8
車いす行政書士～障がい者が独立開業するまでの道のり～ 木明翔太郎	P9
旅の経験 大谷 哲也	P11
ケアを受けるプロとのメール交換（第7回） 小林 博子	P12
車椅子はお父さんの足（第9回） 永島 勝章	P14
はし休め 伊藤 直紀	P15
京都JCIL 訪問記	P16
このままだとベジリグチ！（第8回） 登り口倫子	P20
kiyoppyの窓 清原 史浩	P21
寝たきり障がい者、東大へ行く（第3回） 慎 允翼	P22
思えば遠くに来たもんだ 本松由紀子	P24
ハワイにコンドミニアムの夢（第2回） 石川 るみ	P26
ホーム&ライフ ピーコック	P27
札幌いちご会、福祉村見学へ	P28
「おしゃべりな足指」裏話（下） 杉本 裕明	P31
お守りが役に立つ日が来た（第3回） 澤口 京子	P33
ありがとうございました 長谷川由季	P34
いちご会から会員の皆様へ	P35
2016年度活動計算書	P37
札幌いちご会事業案内	P38
いちご会注文書	P40

表紙：6月の京都で小山内美智子、初の舞妓体験してきました！

誰も開けなかったドアを開けると、 まぶしい光が輝く

2017年6月、京都へ訪問し、日本自立生活センター（JCIL）の渡邊^{わたなべ}琢^{たく}さんと対談をおこないました。

障がい者がヘルパーを虐待している？

小山内 渡邊さんの原稿に感動して京都まで来ました。渡邊さんは障がい者のケアをして身体と頭と両方で感じたことを書いているから、ずっと続けていたら博士号とれるんじゃないですか？

渡邊 でもえらくなって現場を離れちゃうと鈍^{にぶ}ると思うな。過去の経験にとらわれてしまって進歩がなくなると思います。

小山内 じゃあ歳をとったら教科書書いて、学生に教えていけば良いんじゃない？

渡邊 でも本当に、もうすぐ5、60歳になるヘルパーも多くなってきて、今まで通り介助を続けられるかというのは大事な課題です。文章書いたりデスクワークが苦手な人もいるから、体壊しちゃったらどうしたら良いのかなと思います。

まあ、障がい者も高齢化しているので、ちょっと不十分かもしれないけど、おたがい支え合ってやっていければいいのかなあ（笑）

小山内 昔、私たちみたいな人は35歳くらいまでしか生きられないと言われてたけど、今は80歳過ぎてる人だってたくさんいるもんね。JCILからケアを受けている人は何人くらいいるんですか？

渡邊 全部で80人くらいです。ヘルパーは100人以上います。所長が小泉という脳性まひの女性なのですが、その人がすごくてうまくまわしているんです。

小山内 そんなに大きくなって意見が分かれて分裂とかしないのですか？障がい者スタッフがたくさんのヘルパー時間を支給されていたら、たくさん市からお金が入ると思って、よく介助者が「独立して一緒に事業所やろう」って言うんだよね。でもそれだけ人の手も必要になることや経費がかかることがわかっていなくて、思ったより儲^{もう}からないと障がい者が捨てられてしまう。

渡邊 なんだかすごい世界ですね。確かに規模が大きくなったら大変なんだけど、危機を感じたら「このままで良いんだろうか」と話し合うようにしています。分かれたって得しないということがわかったら、このメンバー^{どれい}でやっていくしかないねって。

小山内 ヘルパーさんが「自分を奴隷と感じる」という渡邊さんの原稿を見て、私ばかり意見言っているけど、ヘルパーさんからも言いたいんだろうなと。思い当たるところがあるかもしれないなって。でも言われたらケンカになっちゃうのかな。

渡邊 介助者にひどいことを言ってしまう障がい者もおられます。でも、介助に入れる人もどんどん限られていって、特定の人ばかりに負担がかかっていく状態になり、結果的には障がい者自身もますます苦しくなっていくことも。

例えば進行性の難病だと、どんどん身体が自由に動かせなくなっていって、ちょっと触られただけでも痛かったりして、そのイラ立ちをぶつけてしまう。そうじゃなくても、普段から言葉遣い^{づか}が荒い人もいるし、言語障がい^ごでうまく言いたいことが伝わらなくて爆発してしまう人もいます。でも、面と向かって感情をぶつけられて、そのエネルギーを介助者1

思えば遠くに来たもんだ

もとまつ ゆきこ
本松 由紀子

「こんな夜更けにバナナかよ」この1冊の本からすべてが始まった。渡辺一史^{わたなべかずふみ}氏のノンフィクションで、この本を読んで札幌いちご会、社会福祉法人アンビシャスの存在を知るきっかけになった。

2003年9月8日。私は飛行機内のスクリーンに映った札幌市内の街の様子にくぎ付けになった。駐輪場の自転車はドミノ倒しになり、北大のポプラは根こそぎえぐり取られ、無残な姿で地面に転がっていた。北海道にはめったに来ない台風18号の影響である。私は隣の席のいところに「みちこ姉ちゃん、無事新千歳空港に着くかな」「3時間遅れの出発やけど、大丈夫」いとこの言葉にうなずき、私は窓から見える上空をながめた。

その2か月半前の6月、私と母は初めてアンビシャスを訪問し、施設を見学させていただいた。施設のスタッフに「私は福岡在住なのですが、自立生活体験室(※)を利用したいので許可してください」と、大変厚かましいとはわかっていたが、こう申し出た。スタッフの方は即答なさらなかった。内心、やっぱりだめだろうなあと思いつつ、心のどこかで「万が一ってこともあるかもしれない」と全く根拠のない希望を持って福岡への帰路についた。

それから1か月後、アンビシャスのスタッフから「理事長が許可をしましたので、いらしてください」とお電話があり、晴れて福祉ホームの自立生活体験室を利用するため、札幌へ向かおうとしていた矢先の台風^{しゅうらい}襲来だった。台風一過の混乱をくぐり抜け、札幌に住むいとこの息子のアパートへ到着したのは夜の8時を過ぎていた。

その後、親の反対や^{うよきよくせつ}紆余曲折を経て、あの日から12年目の10月3日、私は札幌市へ移住した。札幌は少しずつ樹木が色づき始めていた。移住に伴う色々な手続きや、施設での生活によりやく慣れてきたなと思っているうちに、早くも年末を迎えた。師走のあわただしさの中、私はヘルパーさんと年末の最後の買い物へ、近くのスーパーへ来ていた。新年の準備の品物を買そろえ、自室へ戻って降りしきる雪をぼんやりとながめているうちに、ふと「あ～本当にひとりになったんだな」と思った。

私はあまり料理はうまくないが、福岡の実家で食べていた雑煮^{ぞうじ}を作ってみた。すまし仕立てにしいたけ、とり肉、かまぼこ、そして三つ葉。福岡では三つ葉ではなく、かつお菜を入れる。買って来た味付け数の子や、黒豆などをテーブルに並べ、雑煮を食べているとき、不覚にも涙があふれてきた。生まれて初めて1人で迎えるお正月。涙はとめどなく流れ、私ははしを持ったまましばらく泣いた。

新年になり札幌で初めての冬は、3回風邪を引き鼻をズーズーいわせつつ、防寒対策にはホッカイロを貼って何とか乗り切った。そうこうしている間に長い冬が終わり、時は6月の初夏の陽光である。初めてアンビシャスを来訪した時も、陽光がまぶしくきらめいていた。福岡から移住して9か月。歌の文句ではないけれど、思えば遠くに来たもんだ。私を南から北へ向かわせた原動力は、何だったかと思いをはせる。